

---

# 地の底から祝福を

有月 悠

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

地の底から祝福を

### 【Nコード】

N8533D

### 【作者名】

有月 悠

### 【あらすじ】

不思議な力を持つ石に支配された世界。人間はその力を使って獣人と呼ばれる者たちを支配していた。だが、世界の均衡を破る少年の誕生により、世界は綻びを見せ始める。

地の底から祝福を

1 神話(前書き)

## 1・神話

太初の時、天の神の一人が自分たちの形に似せて人を創った。

これを見て天を統べる神は喜んだ。

それを見た一人の神が、獣を人間に似せて獣人を創った。

これを見た天帝は怒り、その罪により獣人を創った神は地の底に封じ込められた。

獣人たちは依るべき神を失くし、住むべき地はなく、人にも獣にもなれず地上をさまようしかなかった。

地の底の神はこれを嘆き、その嘆きが地の中に「祝石」を生んだ。

「祝石」により、獣人たちはその獣性をたちまちのうちに失くし、人の間に入れるようになった。

人々は「祝石」を神に見放された哀れな獣人達を、神の庇護のもとに連れ戻す神聖なるものとし、多くの獣人を「祝石」で身近に置くようになった。

が、その後人々は獣の力を失った獣人達を、「祝石」の力を用いて使役するようになった。

ある者たちは「祝石」を「呪石」と呼ぶ。

「祝いの石」ではなく「呪いの石」と。

地の底から祝福を

## 2・獣人屋

赤い髪の少年が、獣人屋の前に大きな傷を負った狼の耳を持つ獣人がいるのを見つけた。

たいした治療もされていないようだ。腹に巻かれた包帯からは血が滲み、顔は青白く脂汗が浮いて呼吸も弱々しい。

立ち止まった少年の影に気づいて獣人が顔を上げる。

一瞬目が合うが、すぐに逸らされた。

だが、その瞳に少年はドキリとした。

なぜか見たことがある瞳をしていたからだ

「坊主、なんか用か？」

店の店主が強面の顔でにらみをきかせながら聞いてきた。

少年はその態度に臆することもなく、見上げるばかりの身長差にも動じずに、強い視線で店主に問い返した。

「この店は、こんな死にぞこないを売ってるのか？」

その言葉に店主のこめかみに青筋が浮く。

「ははは、これはこれは。死にぞこないなんてとんでもない。こいつは剣闘士でしてね、試合に負けて今はこの様だが、怪我がよくなれば千金を生み出す一品だ。本来は殺されるべきところを私は持ち主に特別の許可を得てゆずってもらったもの。だから、さあ、分かっただらさっさと帰んな、坊主」

嘘だな、と少年は心の中で毒づいた。

あの傷では助かるまい。あの嘘を真に受けたバカ正直な奴にふっかけるか、それができなければ鉾山にでも送る気だろう。

業突く張りのろくでなしめ。

「でもこんな傷じゃもう治らないよ。僕の父さんは医者だから分かるんだ。あの獣人もうすぐ死んじゃうよ」

少年はわざと声を張り上げて子供っぽく言った。

店を見ている人や通りを歩く人がひそひそとささやきを交わす。

「あーあ、こんなの買わされたらたまらないよ、他のもどうなのか、分かったもんじゃないね」

店を覗いていた人が一人二人と帰りはじめる。

「こ、この野郎・・・」

「あはは、ケチがついちやったね。ところで僕獣人を一人探しにきたんだけど」

「ああ？」

「よければあの獣人をゆずってよ、もう買い手なんかいないでしょ」

「・・・この、くそ坊主め」

店主は苦々しくつぶやきつつも、あっさりと獣人をゆずった。あの傷が深いことぐらい百も承知だったんだろう。安くても処分できる機会を逃さないのは商売上手だ。

「ほら、さつさとサインしな」

少年は売買成立の契約書にサインする。この役所の印が入った証書を提出しなければ本当の意味でこの獣人の持ち主になることはできない。

この国では獣人を厳しく管理している。

まず「祝石」を持たない獣人は処罰される。街に入ることや働くことを禁止される。

「祝石」を身につけなければ外を歩くことさえできない。

また、「祝石」には魔力によって持ち主の情報を書き込まれる。持ち主が変わったときはこの情報の書き換えを行わなければならない。

い。  
その作業は国立の機関の魔道士たちによって行われる。しかし、裏で勝手な書き換えが行われることもままある。どこにも闇の社会があるのは当然だ。

こうして獣人達は自由を失くし、死ぬまで人間に使役される。狼の耳を持つ獣人が檻から出された。

怪我を負ってはいてもその瞳は覇気を帯びて爛としている。元剣闘士だったというのには間違いないだろう。

苦しそうに痛む傷を押さえ、足枷のついた足をよろめかせながら少年の前に立った。

そしてひざまづいてくるぶしの辺りに接吻をする。

服従の儀式のようなものだ。

「さ、行くよ」

促すとゆっくりとついてきた。少年も歩みを遅くする。

本当はこんな重傷者を歩かせるのは気がひけるが、この国では獣人に同情を寄せることはできない。そんなことをすれば少年のほっころ頭がおかしいと奇異の目で見られてしまう。

少年は宿に戻った。彼はここの住民ではなく、旅人だ。

出たときは一人だったのに帰ってきたら重傷の獣人を連れてきたので、宿の主人がびっくりしていた。

ただでさえ14歳の少年が一人旅をしているのに、けして安くはない獣人を連れてきたなら、そりゃ目を丸くするだろう。だが、無口な質の主人は何も言わなかった。別に獣人に特別料金がかかるわけでもない。

部屋に戻ると少年は獣人をベッドに横たわらせた。

思いもよらない待遇に今度は獣人がびっくりしていた。獣人にまともな寝床は普通与えられないからだ。

「ここは、あなたの寝る場所ではないのか？」

「いいから。そうだ、名前なんだっけ？」

「クアイツ・・・」

「そう、僕はフレイズ。とにかくその怪我治さなくちゃ。ちょっと大変かもしれないけど、なんとかなるよ。あ、店で言っただのは嘘だからね」

「嘘・・・」

「そう。確かに放っておいたら死んじゃうけど、ちゃんと治療すればだいじょぶだから」

この言葉にクアイツの顔の少し赤みが戻った気がする。

「あ、そだ、これ外しちゃおうね」

とフレイズは足枷を外した。

「それと、これも」

と、首につけられた祝石を外した。

「な・・・」

クアイツは驚愕の表情をした。

獣人から祝石を外すなどと、あり得ないことだった。

クアイツの体に精気が戻るのを感じた。体が一気に軽くなる。

(ココデアイツノクビヲヘシオレバ)

心の奥底に沸々と湧き上がる獣の心。

「あ、でも逃げようなんて考えちゃ駄目だよ」

フレイズはメツという感じで人差し指をクアイツの鼻先に押し付ける。

「逃げるんなら、怪我が治ってからね」

と、かわいらしくウインクした。

クアイツは訳が分からなくなった。

目の前の新しい主人は今まで自分を使役してきたどんな者とも違った。

氣勢をそがれておとなしく横になった。

フレイズは彼がおとなしくなったのを見て傷の手当てにかかった。

(うあ、ひどい・・・)

予想はしていたが、腹の傷は膿んで黄色い膿が異臭を放つ。

剣で横薙ぎにされたって感じだろうか。

が、鋭利な傷な分、扱いは容易そうだ。鍛えられた筋肉に守られて内臓まで達していることもなさそうだし。

フレイズは膿を絞り出し、傷口をきれいにすると、絹の糸で傷口を縫い合わせた。

「さ、薬の大盤振る舞いだからな」

そう言うと、荷物の中からいくつかのびんやふくろをを取り出し

て並べた。

「あなたは、医者なのですか？」

クアイツがフレイズを眩しそうに見つめて聞いた。

「違うさ。本読んだだけだし、さっきの縫合初めてだし」

「ええっ!？」

「あ、だいじょうぶ、うまくいったと思うから」

「お、思う・・・」

「僕本読むぐらいしかすることがなくてね。何回も読んでるうちに覚えちゃった。この薬も生えてたやつ採ってきて作ったんだ」

クアイツは啞然とするしかない。いったいこの少年は何者なのか。文字が読めるものはそう多くはない。貴族や学識ある者、魔道士や神官僧侶の類。

とにかく一般庶民では無理だ。まして医術など本を読んだだけで身に付くものだろうか。

「とりあえずこれ飲んで寝てね」

茶色い粉末状のものと水を渡された。口に含むと苦かったが、水で流しこんだ。

「お、すごい。よく飲めたね」

飲めないようなやつを渡したのかと一瞬怒りがわいたが主従関係を思い出して我慢した。

彼の屈託のなさに、つい自分の立場を忘れそうになる。

不思議な少年だ。

「さて、なんか食べられそうなもの買ってくるよ」

フレイズはそう言って出て行った。

残されたクアイツは外されて無造作に置かれた祝石を見つめた。

(逃げようか)

だがためらわれた。逃げたところでこの国では祝石なしに獣人は生きていけない。

薬が効いてきたのが、痛みが和らいできたようだ。

クアイツは目を閉じるとすぐに眠りに落ちた。

### 3・嘘

クアイツは眩しさと目が覚めた。

窓から燦々と太陽が差し込み、温かい光を投げかけていた。

朝か……。

あれからずっと眠ってしまったようだ。

「や、おはよう。調子はどう？」

赤い髪の少年が話しかけてきた。

一瞬誰だっけ、と思ったが、新しい主人だったと頭に閃いた。

「おはようございます、ええっと……」

名前が出てこない。狼狽していると少年は笑った。

「まだ混乱してる？無理もないか。そうだ、何か食べる？」

問われてクアイツは非常に腹が減ってるのに気づいた。

クアイツがうなづく、フレイズは外に出て行った。

クアイツは上体を起こした。

傷はまだ痛むが、気分は悪くない。

昨日までの死にそんな感じが嘘のようだ。

そうだ、何より祝石がない。

あの忌まわしい戒めのない解放感が体を包む。

首に手をやって、素肌の感触を楽しんだ。

産まれて以来、こんなにも長く祝石を外したのは初めてだろう。

獣人は産まれるとすぐに祝石を与えられる。ほぼ国から支給され

るので、戸籍みたいなものだ。親、または獣人の持ち主が申請を行

わなければならない。

そうして与えられた祝石は、一生その獣人について回る。

外すことは許されず、失くしたら厳罰。

死んだ時にだけようやく外される。

そんなものでも、なければ生きていくことはできない。

クアイツはウズラの卵ほどの大きさの紺紫の石を見つめる。

(コンナモノナケレバ)

ふっと、怒りが湧き上がる。埋み火に火がつく。獣の心が蘇る。抑えられない衝動が駆り立てる、・・・破壊を。

「ご飯だよ」

ガチャリとドアが開いて盆に温かなスープをのせたフレイズが帰ってきた。

クアイツはビクンと体を震わせ驚いた。

いけない、獣の心に戻りそうだった。

フレイズが怪訝な顔をしている。

「大丈夫？」

「あ、はい」

「じゃ、これ」

フレイズがクアイツに盆を手渡した。

パンにスープ、チーズ。

クアイツはそれを貪るように食べた。

「はいはい、薬の時間だよ」

食べ終わると狙いすましたように薬が手渡された。

薄い紙に薬包みされたものが3つ。

クアイツは我慢して全部水で流しこんだ。

クアイツはふと昨日の話を思い出した。

「お父様が、医者なのですよね？」

昨日獣人屋の主人にフレイズ自身がそう説明していた。

「ああ、あれは嘘」

「また、嘘・・・」

クアイツが呆れたように見ると、フレイズはいたずらっぽい笑みを浮かべていた。

「あと、獣人が欲しかったってのも嘘だし」

「え!？」

「じゃあ、なんで自分を?クアイツが頭に疑問符を浮かべていると、なんでかな。お前見たらなんか助けなくなっちゃった」

「しかし・・・」

それだけだろうか。獣人はけして安くはないし、所有するにはお金もかかるし、役所へ行って申請したりと大変だ。

「本当は、助けたくなかったさ」

フレイズはうつむきながら続けた。

「でも、お前の目さ、僕と同じ目してる、って思ったんだ」  
「目？」

「そう。自分を鏡で見てるようでさ。そう思ったらつい買ったちゃった」

フレイズはぺろりと舌を出した。まるでいたずらが見つかった時の子供のようだ。

「だから、さ。お前、怪我治ったら出て行っていいよ」  
「ええ!？」

#### 4・本当のこと一つ

クアイツは二の句が継げない。

そりゃ最初は殺してでも逃げようと思ったが、出て行けと言われるというのはまた別の問題のような気がする。。

フレイズは目を逸らしたまま。

いったい何を考えているんだろうか……。

「……私はあなたに服従を誓いました。だから、どう扱おうと構いませんが、出て行けと言われるのは困ります。どういふことかは、分かるはずでしょう?」

獣人に市民権はないのだ。主人を持たざる獣人もまた処罰の対象だ。

「はは、そうだね」

フレイズは乾いた笑いをして黙った。

クアイツは逡巡したが、この新しい主人は僕が意見することに怒らないだろうと思ひ、

「あの、少しくらいは本当のことを言ってください。でない不安です」

と自分の思いを伝えた。

フレイズはやはり怒ることもなく、不思議な笑いを浮かべて、

「本当のことか……。どうしようかな、言っちゃおうかな」と不思議なことを言い出した。

「言つと何か困ることでも?」

「んー?別にそんなこともない……。ああ、あるからなあ。でも、大丈夫かなあ」

何をそんなに隠すことがあるのだろうか?

例えば秘密を自分に言ったところで、都合が悪くなったら消してしまえばいいだろうに。

「じゃ、一つだけ教えてあげる」

フレイズは得意そうな顔で指を一本立てた。

「はい」

「僕実は人間じゃありません」

「でええええっ!?!」

あまりの告白に思いつきり驚いてしまった。

そしてあまりの驚きにしっぽも耳もぴーんと立ってしまった。

それをフレイズはおもしろそうに見つめている。

「じゃ、じゃあ、あなたはいつたい……」

見た感じただの人間の子供である。

自分たちのように耳やしっぽがあるわけでもない。

かといって背中に翼があるわけでも角が生えているわけでもない。

……

「ふふふ。一つだけって言ったでしょ。あとは内緒」

聞かない方が良かったかもしれない……。

なんて主人に自分は仕えることになってしまったのだろう。

でも、悪い人ではない（いや、確かに人ではないらしいが）し、

賢く、優しい。

くだらない人間たちの余興をやっているよりはましかもしれない。

「ま、まあ、あなたが人間であろうとなかろうと、自分を保護して

くれるのであれば問題ありません」

フレイズは嬉しそうに笑った。

「君は物わかりがいいね。気に入った。出て行けなんて言うてごめ

ん。お風呂にでも行こう。さっぱりするといいよ」

そういえば風呂なんて何日も入っていない。この国は湿気が少な

いし、この春の初めの季節にそう必要はないが。

「ええ、行きます」

宿には共同で使う風呂がしつらえてある。

猫の耳をもつ獣人の少女が手伝いについで来たが、下がらせた。

使っているのは自分たち以外にはいなかった。

「着替えを・・・」

「いや、いい」

クアイツは手伝おうとしたが、断られた。

フレイズは自分でてきぱきと脱いだものをたたんでさっさと湯殿の方に行った。

クアイツも慌てて後を追う。

失礼かとも思ったが、背中を観察する。

人間じゃないと言っていたから、つい何かないかと探してしまっただのだ。

しかし、何も無い。

その後背中を流す時にじっくりと観察したがやはり何も無い。

頭、腕、脚。

どこも普通だ。

「探し物は見つかった？」

「え！？い、いや、あの・・・」

「そうなんだよねー。見た目は普通だから困っちゃうよねー。こんなだったらいっそのこと耳でもはえてたらいいのにねー」

「は、はあ」

クアイツは布でフレイズの赤い髪を拭いた。

「そういえば、この髪の色は珍しいですね。こんなにきれいな赤は見たことはありません」

まるで太陽が昇る前の朝焼けの空の色のようなようだ。薄い紫を何度も重ねて最後に赤を透かしたような透明さをもった赤。

「そうだね、これは人と違うかもね」

フレイズは自分の髪を手で梳いた。濡れた髪は筋を作ってまとまる。

「どこが違うのですか？」

「んー、それは・・・」

フレイズは言葉を濁した。

「まあ、そんなこと言ったらこの手も足も全部人間とちがうってこ

とになるけどね」

「はぁ・・・」

クアイツはもう質問はやめようと思った。なんだか絵空事のように全て意味のない会話にしかならないようだ。

クアイツは彼の身体から滴をきれいにふき取り、二人は風呂を出た。

## 5・獣人と人間

「さ、もうそろそろいいかな」

フレイズはぽんぽんとクアイツの腹の傷を叩いた。

あれから一週間。宿に逗留し続け、傷の回復を待った。

おかげですっかりと傷はふさがり、もう出血もしない。

「じゃあ、糸取ろうね」

フレイズはこともなげに言って、小さなナイフで糸をちよんちよんと切つて、するすると糸を抜いた。

クアイツはひきつるようなもどかしい痛みを覚えたが、我慢できないような痛みじゃない。

傷口にはスティッチがうつすらとできていたが、目立つようなことはない。そのうち消えてしまいかもしれない。

「さて、じゃあもうこの宿を出ようかな」

「はい」

荷物らしい荷物もないので、すぐに出発の準備はできた。

「ああ、クアイツ。君には祝石をしてもらわないと・・・」

「分かってます」

クアイツは自主的に祝石に手を伸ばす。

触れるだけで力が抜ける。

ぞわりとする感覚をこらえて首につける。

とたんに思考回路の一部が閉ざされたように頭がぼんやりとした。

「ごめんね。辛いだろうに・・・」

「いいえ。義務ですから」

変なことを聞く人だ。獣人に同情するとは。

「あなたは本当に変な人だ。どうして私たちにそんなに気を遣うんです？」

「どうしてって、だって・・・」

フレイズは言いよどむ。

「ああ、人間じゃないんですよ。失礼しました」  
でもどこがどう人間じゃないというのだろうか？

「もう、僕の話は聞かないで。話したくなったら、話すから」

「はぁ……」

「行こう」

フレイズはクアイツを促して外に出た。

「おじさん、僕たち今日出ていくよ」

「お！？なんだ、急だなあ」

「こいつの怪我が良くなったからね」

フレイズはクアイツを指さした。

「どこに行くんだ？坊主」

「東へ」

「東？何しに行くんだ？あんな森ばかりの所へ」

「薬草を探しに」

「ああ、そうだったな。坊主はインチキ薬草師になるんだったな」

「インチキは余計だよ」

「はははっ。まあ、気をつけてな」

「うん、ありがとう」

フレイズは宿の人や他の人には薬草師になる修行の旅をしている  
と言っていた。

でも全部嘘なんだろうな、とクアイツは感心している。

よくもこんなにきれいな嘘がつけるものだ。

まあ、全くの嘘ではないから、かえって真実味が出るのかもしれない。

でも本当の目的は何なのだろう。まあ、聞いたところではぐらか  
されるか、また嘘をつかれるかだから、余計な質問はしないにこし  
たことはない。

「ここが、この街だから、次の街まで……。ああ、馬車がいいな  
あ。でもお金がなあ」

フレイズは地図とにらめっこしてぶつぶつ言っていた。

「お金、ないのですか？」

「うーん。ちょっと使っちゃったからねえ……。どっしようかなあ」

と言いつつ、馬車に乗る気配はないので、次の街まできつと徒歩だろう。

「私が闘技場へ行つて、稼いできましようか？」

「あーだめだめ。病み上がりなのに。だいたい闘技場に参加するっただけでお金かかったりするんだよね。世の中はせちがらいからなあ」

「はあ」

本当に物事をよく知っている子だ。

こんなに頭がよくてしっかりしていれば、官僚試験を受けて国にでも仕えて出世したらいいだろうに。

「携帯食も高いなあ。二人分だからなあ……。」

頭を抱えてしまった。

どうも、頭はいいらしいが、決断力はあまりないらしい。

優柔不断なことこの上ない。

「考えてても仕方ありませんよ。日が暮れます」

「ひどいなあ。一生懸命考えてるのに……。」

「おじさん、それ四つ下さい」

クアイツは勝手に注文した。

「あいよ」

「四つじゃ足りないよ！」

「お、追加かい？」

「いいです。フレイズ様、大丈夫です。途中何とかしますから」  
フレイズは代金を払い、二人は街の外に向かって歩き出した。

「本当に大丈夫？」

「途中狩りをしましょう」

「狩り？へー、できるの？」

「私をなんだと?」

クアイツはぴこぴこと狼の耳を動かした。

「ああ、そっか。何だ。役に立つじゃん」

「!」

そ、そうですよね。追い出そうとしたくらい自分っぺいない存在でしたよね。

フレイズはかわいい顔して腹黒いところがあるから……。平気で嘘をつくし、人を頼ったりしないし。

どこか寂しい影を持っているが、それを前に出したりしない。

「あれ、でもひよつとして生肉バリバリ?」

「それはさすがに……。これでも半分は人なんですから」

「へー」

なんだか、知っていることと知らないことにむらがあるような……。

「獣人だからと言って、野の獣と同じにしないでください」

クアイツは少しムツとして言った。

「獣人と人って、どこが違うのかな」

フレイズはふと寂しそうに言った。

そういえば獣人の話になると、フレイズはいつも目を逸らす。

「自分のように耳やしっぽを持つものが獣人です」

ぴろんとクアイツは自分の耳を持ち上げた。するとフレイズは笑って、

「うん、そっかよね。クアイツは本当、物わかりがいいなあ」

と言った。

なんだか馬鹿にされた気分がするのは何故だろう?

でも間違っていることはないはずだ。違いなんて明らかではないか。それに祝石があります。人間には何も作用を及ぼしません。でもどんなに耳やしっぽを隠しても、祝石があれば私たちは反応してしまっぺすぐにばれます」

「祝石……か。それもなんでこの世にあるんだろう」

「それは獣人の神がその昔私たちを哀れに思っ  
て授けてくださった  
恵みです」

クァイツは力強く言ったが、

「祝石は呪いの石だと、知らないのかい？」

と、フレイズに冷笑された。

「え・・・」

初めて聞く言葉に、心の底がしんと冷えた。ナイフが刺さったよ  
うに痛みが走る。

「祝石が、呪いの石？」

オウム返しにその言葉を繰り返した。

「どうして君たちは人の下に置かれるているのに違和感を覚えな  
い・・・、そうだよ、産まれた時から祝石をしていればそんなこと  
感じないか」

「呪いとは、どういうことですか？」

「分からないのかい？君たちはただ利用されているだけだったこと  
に」

「まさか!？」

「繰り返し繰り返し神話を覚えさせられ、祝石がなければ生きてい  
けないと思いつまされいるだけなんだよ、君たちは」

「・・・まさか」

力なくクァイツはつぶやいた。

「そんなことが、どうして、分かるのです？あなたの方こそ、思い  
違いをしているのではないのですか？」

あり得ない。そんなこと、絶対に違う。

「そう思う？じゃあ、僕が君の祝石を外した最初の日、逃げようと  
考えたんじゃないのかい？」

「あ・・・」

「ほら」

確かに、そう思ったが、でもすぐに打ち消した・・・。

「祝石を外した瞬間、本当の心が現れた。そうじゃないのかい？」

「しかし、その後すぐにだめだと思って思いとどまった！」

「それが思い込まされてるって言うんだ！」

「でも、本当に生きていけない！祝石を持たない者は捕まって殺される」

「そんな法律があるほうがおかしい。祝石を持たないことが悪いことだなんて決めたのは人間だ！」

クアイツはこぶしを握りしめた。

「どうして、そこまで自信があるのです・・・」

「いいよ、話してあげる。僕が何者なのか」

フレイズは悲しそうに笑った。

## 6・秘密と過去

フレイズは街から十分に離れて、周りに誰もいなくなるのを見計らってから話した。

「クアイツ、人間と獣人の間に子供って出来る？」

「え！？は、ははっ、そんなことあり得ない、聞いたことありません」

獣人の中には性奴もたくさんいるが、その者たちが人間の子を身籠ったということはない。それこそが決定的な人間と獣人の違いともされている。

「うん、そうだよな。でもできちゃったんだ、この僕が」

「は？」

「だから、僕は人間と獣人のハーフ」

「……。冗談は、よして下さい。どうやったら、人間と獣人の間に子供ができるんです？」

「僕の父様と母様が愛し合ったからさ」

「いや、まあ、そうでしょうけど……」

クアイツは口を押さえて目を逸らした。あまりオープンに話す内容ではない。

「でも、普通の人間に見えます。ハーフだと言われても、信じられません」

「祝石は？獣人に近づけると、その力を奪う。人間には何も作用しない。じゃあ、ハーフは？」

「え？そんなこと言われても……」

「だいたいハーフなんて見たこともない。今日の前にいるらしいが、僕がただの人間なら、何も起こらない。でも僕はハーフ。さあ、君の祝石を貸して」

クアイツは言われるままに祝石を外した。

縦に10歩、横に18歩の部屋がフレイズの全てだった。窓には鉄格子。

地面は遙か下。

あの大地に立ったことは一度もない。

窓の外には大きな街が広がっていた。その中心部には大きな建物が見える。

あれは王城だと聞いている。

この国を治める一番偉い人が住んでいるところだと。

そして、その人が自分の父だとも。

石の階段を登ってくるいくつもの足音が聞こえた。

父様が来たんだ！

「父様」

重い鉄の扉が開いて、質素だが立派な身なりの中年の男性が入ってきた。

フレイズは嬉しそうに駆け寄ってその足にしがみついた。

「よしよし、いい子にしていたか？」

「はい。僕いい子にしました」

男性は膝を折ってかがむとフレイズを抱きしめた。

「フレイズ、すまない。こんなところに閉じ込めて……」

「父様はいつもそればかりです」

「フレイズ……」

「父様、約束のものは持つてきて頂けましたか？」

「ああ、もちろんだ。これ」

「は」

後ろに控えていた者の一人が本を手渡す。

「本当に読むのか？」

本の表紙には医術書と書かれている。

「はい。僕は鳥さんを助けるんです」

以前窓のところに鳥が巣をかけた。卵がかえり、雛が産まれたが、

ある日その中の1匹が下に落ちてしまった。慌てて取りに行かせたが、ほどなくしてその雛は死んでしまった。

「医者になれば治せるかもとラムミが言っていました。だから僕お医者になります」

後ろの者の一人がハンカチで目頭を押さえ、

「こんなに優しく賢いのに、なぜあの女の腹からお産まれになったのか……」

「司教、口が過ぎますぞ」

「しかし、大臣殿、見た目も何も変わりはない。獣人とのハーフと誰も分らないのではないでしょうが」

「そんな栓ないことをもう言うな。いくら外見に変わりなくとも、その秘密がいつ人の口の端にのぼるか分からのだぞ。獣人との子だと分かれば人心が惑う、それを厭って王も我々も幽閉を決めたのだ」

獣人の侍女との間にできた子供をどうするか。

あまりの前例のなさに王城は喧々諤々の議論の末、この聖堂に幽閉することを決定した。

「だが、その後人間の妃を娶らないとは、想定外だったがな……」  
「美しい者だったからなあ。あの人鳥は」

「ああ、あの見事な赤鳥は古今東西探してももう見つからないだろう」

「あの歌をもう一度聞いてみたいものだなあ」

「しっ、王に聞こえる」

フレイズの母はフレイズを産んだ後、死んでしまった。秘密裏に殺されたと噂もあったが、真実の程は定かでない。

「王、そろそろ時間が……」

「分かった」

「父様、もう行ってしまおうのですか？」

「ああ。すまない。忙しいのだ。あまり王都を離れるわけにもいかない」

「またすぐ来て下さい」

「分かった」

ぞろぞろと全員が出ていくと、フレイズは一人残された。寂しくなんか無い。これは仕方のないこと。

フレイズは医学書を熱心に読みはじめた。

「父様、もう来なくていいです。政務に戻られた方がいいのではありませんか？」

「フレイズ……」

フレイズは14歳になつていた。さすがに小さな頃のままではいられない。年を追うごとに面会の回数は減り、会話も少なくなった。新しい本はいらないか？」

「いりません。それよりここから出して下さい」

「それはできません」

「どうして！？僕を知る人なんか誰もいないんでしょう？外に出たつて問題ないじゃないですか！」

「お前はただの人ではない。分かっているはずだろう」

「でも外に出たい！お願いここから出して！」

「言うことを聞かないか！」

パシンツと頬をたたく音が響いた。

「父様……」

「ここから出ることはならん」

「嫌だっ！出たい！」

「お前にも祝石をつけてみようか」

「……父様!？」

「そうすればおとなしくなるかもしれんな」

「そんな、やめて……。僕は獣人じゃない」

「誰か、祝石を」

「やめて……。僕は……」

目の前に祝石がぶら下げられる。

フレイズは記憶を頭から取り払ってクアイツから祝石を受け取った。

ほんの数週間前のことだ。

獣人とのハーフが祝石を身につけたらどうなるか。

「こうなるのさ」

フレイズがその首に祝石を付けた。

## 7・覚醒

紺紫の祝石が金色に色を変えた。

「な!?!」

なんだこれは。こんな変化をするのは初めてだ。

そしてフレイズの瞳の色も黄金色に変化する。

「は、羽……!?!」

背中に翼が見える。朝焼けの色をした、美しい赤い色の羽。

だが実態をもってはおらず、ゆらゆらと炎のようにゆらめいている。

その翼が羽ばたくと、ふわりとフレイズは宙に浮かんだ。

「どう?信じてもらえた?」

クアイツはぶんぶんと首を縦に振った。

「祝石は、呪いの石」

フレイズは空を見つめたままつぶやいた。

「与えられた恵みに虐げられてきた獣人。だが、今それを覆そう。

生まれるはずのない僕が生まれたその存在の意味をここに印そう」

フレイズの身体が神々しく輝きを帯びる。

「目覚めよ、獣人達。祝石の本当の力とその意味を知れ」

「うわぁっ?」

何かが身体の中を駆け抜けていった。

「きゃー!ー!ー!」

ガシャーン!

「うわー!」

街の方からいくつもの悲鳴と物の壊れる音が聞こえてきた。

「なんだっ!?!」

街から煙が上がる。

いよいよ高まる悲鳴と怒号。

一体、何が起こっている……!?!?

「おや、君は祝石を僕に与えてしまったから変わらなかったんだね」

「フレイズ様、一体何をしたのです!？」

「人々に罪の贖罪を、その命で」

「!?!」

「そして僕は新しい国を作る。長きに亘った人の世に終りを。罪を負った神に復権を。そしてこの地上に新しき神として迎え入れる」

「フレイズ…さま…」

「僕こそはこの国の王子。その王座を手に入れる」

フレイズは大きく羽ばたくと空を駆け上った。

王都のある方向へとその輝く姿は消えた。

クアイツはその姿を茫然と見送ると、街へ戻った。

「これは…!?!？」

クアイツは目を見張った。獣人達の姿が変わっていた。

それまでほぼ人と変わらないほどだったのに、体毛が生え、牙や爪がその特性に応じて大きく変化していた。

街の中は惨憺たる有様だった。

祝石の力で覚醒した獣人達は人々を襲い、あちこちにその屍が横たわっている。

もともとその身に武器をもたない人は、突然襲われればひとりもいない。ひるがえって獣人達はその身に宿る野性を解放すれば、人間に劣ることはない。

女も子供も老人も関係なく、獣人達の手にかかって死んでいた。

獣人達は皆狂気の色をその瞳に宿し、街をうろついていた。

「お前、獣人なのになぜその姿のままなのだ」

話しかけられ驚いて振り向くと、一人の獣人の男が立っていた。

殺気のような気配を感じ、ごくりとつばを飲み込んだ。

「たまたま、祝石を、外していたんだ…」

「そうか。ならすぐつけることだ。素晴らしいぞ。もう人間などに隷属しなくていいのだ」

「あいにくと、持ち合わせてない…」

「何故だ？我々に祝石を外す権利などないはず。さてはお前人間の味方か？人間に優遇されていたのか？誰もがもちえなかった自由を手に入れていたのか？」

「そ、そんなことはない、たまたまだって」

「今すぐつける」

獣人の男がにじりよってきた。

「ちょ、自分の持つてくるよ。じゃ・・・」

クアイツは身を翻して走り去った。

皆、狂ってる・・・。

欲望も何もかも剥き出しだ。

隷属されながらもある程度の平和は保っていたはずだ。

こんなの、こんなのは間違ってる・・・。

クアイツは近くをうろついていた馬に飛び乗ると、王都へと向かって走りだした。

「父様、お久しぶりです」

「フレイズ・・・」

王宮の一室にフレイズは舞い降りた。

突然の獣人達の変貌に、城下は上を下への大騒ぎ。

各所で獣人達との格闘が行われていたが、フレイズが現れると、皆フレイズに付き従った。

多くの獣人を引き連れ、フレイズは王に迫った。

「新しい世がきました。これからは僕たちの時代。古き神々と王には退いてもらおう」

「フレイズ、待て、話し合おう」

そう言つて、王は後ろに目配せをする。

数人の衛士達が剣を振りかざした。

「僕たちに勝てるんですか？」

熊が、虎がその爪を振りかざし衛士達を一瞬のうちに葬り去った。

「ひ、ひいつ……」

フレイズは王のその首に手をかける。

「最後に一つだけ聞いておきたい。母様は本当に難産の末に死んだのか」

「そ、それは……」

「答えるっ！お前は母様をどうした！」

後ろにいた重臣の一人が、

「フレイズ王子、あれは、議会で決めたこと、王の責任では……」

「やっぱりそうか！」

フレイズの鉤爪が王の首に突き刺さる。

「ぐはぁ……」

王は血泡を吹いて絶命した。

「皆の者、人間どもを殺せ！神殿を壊せ！新しき世を創ろっぞ！」

「おおっ！」

狂乱の祭りが始まる。

## 8・王都

王都は血の匂いであふれ返っていた。

そこに人間の死体が転がり、死臭を放つ。

狂乱の覚醒から3日。ほとんどの人間は殺されたか、どこかへ逃げ出して都の中にはその姿は見受けられなかった。

ひどい有様だ。

クアイツは布を被り、顔を隠してなるべく見つからないようにして王都に向かった。

獣人を疎んだ天統べる神はやはり正しかったのだろうか？

だとしても、この惨状を見逃しているようではどちらともいえない。

自分はきつと祝石の覚醒の影響を受けなかった唯一の獣人だろう。世界中の獣人はほぼ人に捕えられ、もう野生のまま生きているものはいないだろうから。

人間の監視下にある獣人は例外なく祝石を付けなければいけないし。

だとすればこれは地の底の神の奸計なのか。

地の底から自分を地に閉じ込めた天統べる神に復讐を企てた。

一度人間の下に獣人をおいて監視・管理させ、全ての獣人を掌握したところでフレイズを誕生させ、その天下を取る。

愚かな人間は便利なものを手に入れたと言ってその力を存分に使った結果がこの惨状というわけだろうか。

・・・そんな馬鹿な。

いと高き御座におられる方々の考えなど、知れようはずもない。

クアイツは足を早めて、孤独な少年の顔を思い浮かべていた。

王城には人の気配は少なかった。

クアイツはやすやすと城の奥深くに入り込んだ。

フレイズはどこだろう？

あの寂しい目をした少年は。

最初出会った時、何故か自分を助けたという。その理由も分からずに。

寂しかった、ただそれだけですよ。

檻に閉じ込められた自分に自分の姿を見て居ても立ってもいられなくなつたんだ。

そして放っておけなかった。

優しい少年なんだ。

もっと自分に素直になればいいのに。

頭がいくせに肝心なことは分からないようだ。

もっとも、どこかのんびりとしたあの性格では、分からないのも無理はないかもしれない。

フレイズは城の奥の一角に、ぼんやりと座っていた。

「フレイズ様……」

「……誰だ？」

陽はもう落ちかかっており、テーブル上の小さな灯火が、彼の姿をわびしく浮かび上がらせていた。

「クアイツです。もうお忘れになつたんですか」

「クアイツ！？よく来た！」

フレイズは立ち上がって嬉しそうに笑った。

「どうしたんだ？わざわざ来てくれたのか？」

以前と変わらぬ笑顔、金の瞳や炎のような羽もそのままだが。

無邪気にクアイツの腕に手をかける。

その指は鳥の鉤爪に変化しており、少し力を入れられたら怪我を  
してしまいそうだ。

その変化が、クアイツは無性に悲しかった。

「祝石はどうした？まだ付けてないのか？他にいくらでもあるだろ

うに」

「……。以前、祝石を身につける私を案じてくれたあなたが言う言葉には聞こえませんか」

「！！」

フレイズはハツとしたが、やんわりとした笑みを浮かべて、

「クアイツ、それは覚醒の前の話だ。今は違う、地の底の神の本当の祝福を受けるんだ」

クアイツは視線を外し、窓の外を見た。

「この惨状が祝福だと？・・・それで、あなたは少しでも幸せになれたのですか？」

フレイズは腕を放し、少し後じさった。

「し、あわせ・・・」

「祝福を受けたのでしょうか？幸福を、あなたは与えられたのですか？」

クアイツは視線を元に戻し、冷たい目でフレイズを見た。

フレイズは考え込むように黙ってしまった。

全く、都合の悪いことはすぐに黙る。分らず屋で頑固者だ。

「どうしました？頭のよいあなたに答えられない問題ですか？」

クアイツは少し笑みを浮かべると、立膝について彼の目線に合わせ、その手を取った。

「クアイツ、僕は・・・」

ふいに顔を歪めると、その金色の瞳に涙を浮かべ、クアイツに抱きついてきた。

「幸せ、じゃない、よ・・・、望みを叶えたら、きつとすごく嬉しいと思つてたのに、そんなことちつともないんだ。幸せなんて、どこにもない・・・」

「フレイズ様・・・」

「最初、祝石である牢獄から出たれた時は本当にうれしかった。だから、その力で望んだものすべて手に入れた。自由、王座、復讐」「復讐？」

「……。父様を殺した」

「!?!」

「僕を閉じ込めて母様を殺した父様が憎かった。だから殺して、復讐した」

「ああ……」

怒りに駆られてなんということ

「なのに、今は父様に会いたい。父様に会いたい」

フレイズは声を殺して泣いていた。泣き声を上げないのは、例え泣いたところでその父が来ないことを分かっているからか。

神はなんと酷い運命をこの少年に与えたもつたのか。

クアイツはその背中を優しくさすった。

「少しお休みになった方がいい。顔色が優れませんよ」

「……眠れないんだ」

「側についてあげます」

クアイツはフレイズをそのまま抱えあげた。

「ちよっ、歩けるよ!」

「寝所はどこです?」

「……、あっち」

下ろしてくれそうもないので、フレイズはおとなしく教えた。

教えられた場所はとも王の眠る場所とは思えない質素な部屋だった。

おそらく使用人の部屋だろう。

「部屋、どこ使っていいか分かんなくて。前いたとこみたいだったから……」

フレイズは困った顔をして言い訳した。

「前いたところ?」

「うん……」

フレイズは自分の生い立ちを話し出した。

獣人、ハーフ、王子、監禁……。

話し終わると、疲れたのかそのまま眠ってしまった。

数奇な運命は、この世を変えるほどに少年を歪ませてしまったのか。

これからこの世界はどうなるのだろう。

この少年は、果たしてうまく導いていけるのか。

クアイツはそつとその頬に触れた。

父を想って流した涙の跡をなぞる。

少し痩せたか、目の下には隈ができていて痛々しい。

祝石に目を遣る。いまだ金の光を放ち、フレイズの細いあこの輪郭を照らしている。

これを外せば、ひよつとしたら元に戻るかもしれない。

淡い期待を抱いて手を伸ばした。

そつと手を伸ばそうとした時、

「!!!」

クアイツの耳がかすかな物音を捉えた。

カチャ・・・

カツ、カツ、カツ、カツ・・・

ジジジ・・・

剣の音、複数の足音、松明の燃える音・・・

誰だ・・・？胸騒ぎがする、嫌な感じがする。

クアイツは忍び足でドアに近づく。

「・・・化け物は・・・」

「探せ・・・」

「獣人め・・・」

人間だ・・・。

逃げた奴らがもどってきたのか？

フレイズを倒しに。

ボタン、ボタンと片っぱしからドアを開けて回っている。

警備が手薄すぎる！

自分自身楽々と侵入できた。

見つかるのは時間の問題だ。ちらりとフレイズに目を遣る。起こ

したくない……。

「ちっ……」

クアイツは舌打ちしてドアを静かに開けた。  
場内は既に夕闇に包まれて暗い。

廊下の奥に松明がゆらめき、数人の影を落としている。

クアイツは闇にまぎれて移動する。

剣がないのが悔やまれる、まあ、いいさ、奪えば……。

クアイツは飛び出した。

「うわっ！」

「獣人だ！」

「ひいっ！」

「怯むな、一人だ！」

1、2、3……全部で5人。

全員剣を手にしている。

この狭い廊下なら大丈夫、何とか……。

「立ち去れっ！」

バタンと扉が開いてフレイズが出てきた。

「ええ!？」

クアイツは慌ててその歩みを止める。

「あ、あいつは！」

「いたぞ!!！」

「こ、殺せ、あいつが親玉だ！」

「見くびってもらっては困る」

フレイズが口を歪めてつぶやくと、その背の羽が輝きを増した。

その手に赤い光弾が浮かぶ。

「いまだ悟らない愚か者たちよ、おとなしくしていればいいものを  
わざわざ殺されに戻ってくるとはな」

「わあああっ！」

一人が奇声を上げながら剣を振りかざして向かってきた。

「はあっ!!！」

フレイズの手のひらから光弾が飛び出す。  
「ぐわあっ」

光弾は男の一人に当たり、その男は弾き飛ばされた。  
「怯むなっ、殺れっ！」

男たちはなおも向かっていく。  
「愚かな」

フレイズの髪がふわりと揺れると、手の平に一段と大きな赤い玉が浮かび上がった。

「はあっっ！」

それを投げつけると男たちは全てふっとんだ。

「う．．．」

「くそあ．．．」

うめき声を上げて立ち上がれない男たち。

「フレイズ王！大丈夫ですか？」

騒ぎを聞きつけた他の獣人たちが駆けつけてきた。  
「始末しておけ」

フレイズが命じると、あっという間に殺戮現場に変わる。

彼らの爪から滴る血の音を、クアイツの鋭敏な耳は聞き取っていた。

「片づけておけ」

冷やかに再度命令すると、フレイズはもとの部屋に戻って行った。  
クアイツは追おうとして、動けなかった。

．．．。

もうフレイズは以前のフレイズではないのか．．．。

自分はいったいここまで何をしに来たのだろうか？

孤独な少年の心を取り戻したかったはずだ。

運命の変転を止めたかったはずだ。

だけど．．．。

フレイズの冷やかな笑みが蘇る。

平然と命令を下すあの表情に、恐ろしさを感じた。

「お前は誰だ。ここで何をしている」

動けないクアイツに、獅子のたてがみを持った一人の獣人が話しかけてきた。

「・・・」

「答える！」

「分からない」

「・・・は？」

「俺は確かに何かをしに来たはずなんだが、・・・忘れてしまった」  
「貴様、真面目に答える」

「なあ、お前、これからどうするつもりなんだ？」

「は？」

「人間に恨みを持ち、大いなる力を手にいれその恨みを晴らし、その後どうするんだ？」

「決まっている！フレイズ様の下に獣人のための新しき王国を築き上げるのだ！」

「スプーンも握れないその手で？」

獅子のたてがみを持つ獣人はその手に目を遣る。その手は立派な獅子の腕に変化していた。

「つ・・・それはっ」

言葉に詰まるところを見ると、難儀をしているようだ。

「誰が壊れた城の修理をする？誰が法律の文書を書く？もうお前たちは人間ではなくなってしまうんだぞ、野の獣のように生きるしなくなるんだ！！」

「うるさいっ！」

獣人はその太い腕をぶんつと風をうならせて振った。

クアイツはそれをひらりとよける。もう動けるようだ。

「そんなもの人間を奴隷にすればいい話。俺達の代わりになっ！」

「人間が素直に言うことを聞くとでも？人間用の祝石なんかありはしないのに」

「う、うるさいうるさいうるさいっ！..」

獣人はめちやくちやに腕を振って向かってきた。

クアイツは身を翻して走り出した。

「待て！皆、あいつを捕まえろ！」

クアイツは逃げながら考えた。

やはりこの世界の変化は何か破たんしている……。

文明を築けない彼らにこの先の未来は暗い。

やがて逃げた人間たちが復讐を企てるだろう。いや、もう始まっているか。

危機に対してやつらは恐ろしいまでの団結力と結束力をもって生き延び、力を蓄え、やがて獣人を滅ぼすだろう。

結局何だったんだ、この変化は。

ただ踊らされているだけじゃないか。

人間も獣人も、誰も得をしていない。

得をしたのは……。

大量の贅を手に入れた神々。

いったい何をするつもりなんだ……！

フレイズの顔が頭をよぎる。

もう一度会ってみよう。彼は地の底の神の依り代だ。

クアイツは手近な部屋に入り込むと、窓から外へ逃げ出した。

## 9・滅び

城を逃げ出したクアイツに、再びフレイズに会う機会はなかなか訪れなかった。

先日の人間の襲撃により、城は警備が強化され、入ることが困難になったからだ。

クアイツは仕方なく、日々惨状が広がる王都で潜伏していた。

死体を埋葬する者はなく、死臭だけがひどくなる。人の手を失った獣人たちは食料を調理する手段も失くし、生のままの野菜をむさぼる姿があちこちで見られた。

しかし王城からは何の通達もなく、獣人たちは日々衰弱していく。フレイズは何をしている。獣人の王となったのではないのか。このままでは人間の報復を待たずとも自滅してしまふ。

が、再会の時は早くも訪れた。

その日は雨だった。しとしととした雨が夜中から降り続き、日中になっても止まなかった。辺りはどんよりと薄暗く、今が昼間であることを忘れそうだった。

人間たちは手に手に武器を持ち、王城の背面から肅々と軍を進めていた。

どこにこんなにも潜んでいたのか。たぶん万は下らないだろうと思われるほどの数だった。

先頭の馬に乗った男が声を張り上げた。

「獣人などおそるるに足らず！」  
手にした剣を振り上げる。

「神に祝福された我らが負けようものか！滅ぼされるべきは獣人なり！今こそ彼奴らを滅ぼし尽くし、本当の人の世を造り上げようぞ！」

「おおおおおおお！！！」

「天運は我らにあり！いくぞおおお！！！」  
男は剣を振り下ろす。

「進めー！ー！！！」

「わああああああ！！！」

「敵襲ー！ー！！！」

鐘が打ち鳴らされ、王都に戦慄が走る。

「人間だ、人間が来た・・・」

「殺せ・・・殺せ・・・」

獣人たちは虚ろな目で北の城門を目指す。覚醒によって日に日に人間らしさがなくなっていた。あるのはただ何百年と続いた人間の支配への復讐心のみ。

クアイツは王城に立ち上る赤い光を見た。

薄暗い空の下、それははっきりと見えた。

この混乱の中なら王城に入れる・・・。

クアイツは走り出した。

フレイズは王城の北の見張り台に登っていた。

眼下には万という人間が今城壁に向かって突進してくるところだ。

「人間どもめ！わざわざ集まってくれとは重畳！今地の底の神の祝福をやるう！」

赤い光が天に向かってほとばしる。

赤い光はぐるりと渦を巻くと大きな球体に変化した。

「死ねっ！」

赤い球体は大地に向かって投げ落とされた。

ズウウウウウン・・・と鈍いような音がして、砂煙のあとには大きなクレーターが生じ、その中には人の消し炭がいくつも折り重なっていた。

「は、は、は……いい気味だ。皆の者、人間を滅ぼし尽くせ！」  
「ウオオオオ!!!」

その声に呼応して獣人たちが城門を開き、怒涛の如く流れ出た。  
戦場は人間獣人入り乱れての大混戦となる。

「フレイズ様っ!!!」

「クアイツか……。お前も高みの見物か」

「本当に人間を滅ぼすつもりですか!？」

「無論。黙って見ている。こんなショーはないぞ」

すると再び腕を高く振り上げた。赤い玉が浮かび上がる。

とにかくあの祝石を外すんだ……!!!

そう思っただけで奪取の体勢をとると、その動きを見てとったフレイズ  
はカッと目を見開いた。

「動くな、動けばこの赤き光を喰らわせる!!!」

「!!!」

クアイツは思わず立ち止まる。

宙に浮かんだままの光弾がゆらめいた。

「そこで黙って見ている」

フレイズは冷たく笑った。

「やめるんだっ!!!」

「いけっ!!!」

ゴウツと唸りを上げて、光弾は地上に降り注いだ。

「ぎゃあああああっ!!!」

「ウワアアアアアアアアアアッ!!!」

人間は赤い光の中で次々と倒れていった。

「ふ、は、ははははは……」

フレイズは翼をはためかせた。

「滅ぼすんだ、全て、全て……」

ふわりと宙に浮くとさらに光弾をその頭上につくりだした。

クアイツはぐんと身を沈めると、高く跳躍した。

「な、離せっ!!!」

クアイツは見事その足首を掴んだ。そのまま服を順につかんでフレイズをよじ登る。

「やめろ、来るなっ！」

クアイツは首の祝石に手をかけた。瞬間、獣化が始まる。ぞわりと不思議な感覚が身体を駆け巡った。

「っ!？」

クアイツはびっくりして思わず手を離してしまった。しまった……。

フレイズは赤い光弾をクアイツに向って放つ。

「ぐわっ」

クアイツは痛みあまり手を放し、下に落ちた。

クアイツはこの後、どうしてあの時もつと必死になって彼に貼りついて、命と引き換えてもあの祝石を外さなかったのかと後悔した。フレイズは、地の底の神は本当に全人間を滅ぼすつもりのようにだった。

王都を攻めてきた人間たちは壊滅した。

今フレイズはその自由の翼で地方を回り、人間と獣人を戦わせては確実に滅亡への道を進んでいた。

クアイツは王都でフレイズの帰りを待った。

人間たちを滅ぼしたならきつと帰ってくる。そう思ったからだっ

## 10・願い

クアイツは静かな王都で考えつづけた。

何度もあの時の光景が蘇る。自分の身が忌まわしい。人間だったらよかった。そうすればあの時ひるまずに済んだかもしれない。

外は今日も雨だった。

普段はこの季節は雨は少ないはずなのに、ずっと寒く、雨の降る日が多かった。

フレイズ様、あなたは言っていたではないですか。

望みを叶えたら幸せになれるかもと、でも叶えた先に幸せはなかったと。

憎んだ父を殺して、その後恋しいと涙流したはずなのに。

・・・俺はあの涙を信じよう。

憎しみゆえにその相手を殺したとてそれで幸せになることはできないと悟ったのなら、後悔を背負ってだって、生きていくことはできる。

どんな選択だって、間違いではないはずだ・・・。

季節が移り変わった。

フレイズと初めて会ったのは春の日差しがまぶしい頃。

だが今はもう夏も終わりがかけている。

クアイツは馬鹿みたいに墓ばかり掘って遺体を埋葬して回っていた。

手には血豆ができ、何度も潰れた。

それでもいつこころに減らない。

人のいない世界は想像以上に静かだった。

これは寂しい・・・。世界はまるで沈黙してしまっただかのようにだ。思いを失った世界は口をつぐみ、空と大地だけが虚しく広がる。

存在は意味を失ったようだ。

ふと、空を赤いものがよぎった。

慌てて目を向けると、遠くにその姿を見つけた。その光は王城へと降り立った。

クアイツは手にしていたシャベルを放り出すと、そこへ向かった。

フレイズは城の中庭でぼんやりとしていた。

世話する者のいなくなった庭は、それでも懸命に季節の花を花開かせていた。

「こんなところで何をしていたらっしゃるのです?」

「クアイツ・・・」

フレイズは驚愕の眼差しでクアイツを見た。

フレイズはボロボロだった。顔は煤けて黒く、髪は伸び、梳られてなくて綺麗だった赤い色は艶を失いぺたりとしている。

「人間は滅ぼせましたか・・・?」

「いや・・・」

フレイズは口を歪めて笑った。

「あいつら、殺しても殺しても湧いて出てきやがる。それよりも獣人の被害のほうが大きい。このままだと滅ぶのは人間じゃなくて獣人だ」

フレイズはふらりと歩いてベンチに腰かけた。

「疲れた・・・」

そう言うのと背もたれに体を預け、目を閉じた。

「もう祝石の力も残り少ない。この力は獣人の力を吸い取って蓄えられたものだった。何百年の積み重ねも、人間を滅ぼすには至らなかったらしい」

「もう外してはいかがですか?」

「・・・」

「もう十分でしょう。祝石を外して、元の姿に戻るんです。そして人間の中に紛れてしまいなさい」

「そんなこと、できるわけない・・・」

「何故？あなたは私たち生粋の獣人のとは違う。人と変わらない姿かたちを持つているのですよ。あなたがハーフだと知る人間はもうこの世には誰もいない」

「嫌だ、人間になどなりたくない・・・」

「結局それですか？嫌だ嫌だと駄々をこねるだけ。なまじ特殊に生れついたために世界を崩壊に導いてしまったのに」

「・・・僕は馬鹿だったのか？」

「ええ、あなたは地の底の神の奸計にうまうまとはまっのですよ。力を持つてもそれを使うべきではなかった、父を殺してその後泣いたのはどこの誰でしたか？」

「父様・・・」

フレイズは目を開いて遠くを見つめた。

「・・・、きちんと葬つてありますよ。見に行きますか？」

フレイズはうなずいた。

城の裏手の空き地にくつつもの十字架が並んでいる。

その中の一つには王冠が掛かっていた。長い雨ざらしにも金の王冠はいまだ光を失わずに光を反射していた。

フレイズは祝石を外すと、元の姿に戻った。

墓前にひざまずき、両手を組み合わせて祈った。

長い祈りの後、フレイズはつぶやいた。

「僕は本当に人の中にはいつていいんだらうか」

「誰が咎めるんですか？」

「僕自身だ。いったいこの手で何千何万の人を殺しただらう」

「だがそれを知っているのは他に誰もいない。黙っていればいいんです」

「ははっ・・・。お前、すごい奴だな」

「フレイズ様が生真面目すぎる」

「でもお前は・・・？」

「・・・」

「僕はこの通りだから何も問題ない。だけど・・・」

「まあ、仕方ないです。人間に見つかったらやっかいだ、どこか遠くに逃げるしかないでしょう」

「嫌だ！クアイツ、一緒にいて！」

「ほら、また『嫌だ』がでた」

クアイツは微笑んでその髪をなでた。

フレイズは慌ててその口を隠す。

「でも・・・。クアイツには側にいてほしい。なぜ願いを叶えちゃいけない？」

「願いがかなえられたのはどんな時ですか？」

「それは・・・」

すぐに小鳥を治したいと願った時にもらった医学の本が頭をよぎった。

「叶えられなかった時は？」

(嫌だ！ここから出して！)

外に出たくて癪癪を起した。だが、いくら言っても出してもらえなかった。

「何が違うの？」

「さあ・・・。分からなければ、私を引き止めることはできないです  
すね」

「お願い、意地悪しないで教えて」

「その願いは叶えられそうですか？」

フレイズはむうっとして黙った。

「それじゃ、もう一問。私を買ったのは何故でしたっけ」

「それは、お前の目を見て、僕と同じだと思って、助けてやりたく  
なっって・・・」

フレイズははっとした。

「ようやく分かったようですね。他を助けたいと願う願いはやすやす叶えられるけれど、自分のための願いはなかなか叶えられないの

です。・・・よく覚えておくといいですよ」

「・・・そんなこと知らなかった」

フレイズはうつむいて拗ねたように言った。

「これを知っている人は少ないですよ。フレイズ様は幸運だ」

「幸運・・・？」

「その知恵を使って私を引き止めてごらん下さい」

「え・・・？」

自分のためじゃなく、他を助けたいと願う・・・。

でも、今のクアイツはちっとも困ってなんかいない。どうすればいい・・・。

「お前がいないと困るのは僕のほうなのに、どうしたら引き止めることなんかできる？」

思っていることをそのまま口にした。

「上出来ですね」

「え？」

「私があなただを助けたくなくなってしまった。仕方ないですね。もう少しお付き合いしましょう」

「クアイツ！！」

「とにかく風呂にでも入ってください。ひどい格好だ。それから食事しましょう」

「うん！」

二人が去った後、地面に置き忘れられた祝石がぼんやりと光った。

11・夫へ

二人は中庭を見渡せる広いホールに食卓をしつらえ、たくさんの料理を作って並べた。

久しぶりに楽しい食卓になった。

「おいしいっ」

「それはよかった」

「コックにもなれるんじゃないか？」

「作ってもらうほうが好きなんです」

「ぼ、僕は料理できないぞ・・・」

「ええ、期待してませんよ」

「言ったな」

他愛ない会話が続いた。

「もう眠いのですか？」

食事が終わると、フレイズは目を半分閉じてこくりこくりと船をこいでいた。

「う・・・ん」

一瞬間を上げるがすぐに机と友達になろうとする。

「やれやれ」

クアイツはフレイズを抱えあげてベッドまで運んだ。

「うにゃ・・・」

ベッドに体を横たえると、フレイズは寝言も言えない変なつぶやきをもらしてすぐに寝付いた。

そういえば・・・。

この後どうするか、自分で茶化して答えてなかった気がする。

もしも本当に人の世がきてしまったら、この少年とは別れなければならぬだろう。

「・・・」

それはとても辛いことのように思えた。

クアイツはフレイズの髪をそつとなでて、その寝顔をしばらく見つめていた。

夜半。

フレイズは寝苦しさに起きだした。

今日は月もない、真つ暗闇。少し目が慣れると、隣のベッドで寝息を立てているクアイツの姿が浮かび上がる。

と、窓の外で金色の光がゆらめいたのが見えた。

フレイズはぞつとしてクアイツを揺り起こした。

「クアイツ、クアイツ、お願い起きて・・・」

「んん・・・」

強く揺すつても起きない。

「ねえ、窓の外なんかいるんだ。起きてよ・・・」

窓の外でさらに光った。

仕方ない。

フレイズは恐る恐る近づいて窓の外を覗きこんだ。

外にはちょうど城の裏手の墓地が見えた。

そこに置き忘れた祝石が、光を放っていた。

「どうした」

クアイツがいつの間にか後ろに立っていた。

「うわわっ」

心底びっくりしてしまった。

「驚かさなくてくれ・・・。あれ見て、祝石が・・・」

「まだ光ってる・・・。ぶっ壊しといたほうがいいな」

「うん」

二人はランタンを持ち、連れ立って墓地へ向かった。

二人が近付くと、祝石は輝きを増した。

「大丈夫かな・・・」

「さあ・・・」

(帰りたい・・・天に帰りたい・・・)

突然頭の中で男とも女ともつかない声が響いた。

「うわっ」

「なんだ!？」

二人は顔を見合わせた。両方とも聞こえたらしい。

(私はただ喜んでほしかっただけなのに……。何故人間だけが祝福されたのか……)

「これは、地の底の神か……。!?ということとは創世の歴史は、本物だったのか」

クアイツは愕然としてつぶやいた。

(お許しください……。獣人は我が手で滅ぼします……)

「なっ……。獣人を!?おい、お前は人間を滅ぼすのではないのか!？」

(悔恨により流した我が涙は獣人を人間に近づけるもの……。けれどもそんなことでは許されなかった)

「う、ああ!？」

クアイツの体から突然力が抜けた。

これは、この感覚は……。長年慣れ親しんだ祝石の脱力感。

(我れは決意した、獣人を滅ぼすことを)

「や、何……。!?」

フレイズも操られたようだ。

(そのために我が力を受け入れる器が必要だった)

フレイズの体が見るみる獣化していく。

「ああっ……」

(そして獣人を人から憎ませ、あとは時を待てばよかった)

フレイズの手の中に赤い光が生まれる。

(そして、お前で最後だ、お前を殺せば我れは天に帰れる!)

フレイズはぎくしゃくとした動きで体を回転させ、正面にクアイツをとらえる。

「い、やだあああああああっ!!!」

フレイズは懸命に抗おうとするが、手の中の光は大きさを増して

いく

「クアイツ、お願い、逃げて逃げてえええっ！」

だがクアイツには力が入らない。その場がくりと膝をついてフレイズと対峙した。

「うわああああああっ！！」

手が徐々に開き、赤い玉がその手を離れ浮かび上がる。

クアイツはそれを自分でも驚くほど静かにみつめていた。

「いやだああああああっ、やめろおおおっ」

ゴウツ！唸りを上げて赤い光はクアイツに直撃した。

「うわああああああっ！！」

クアイツは吹っ飛ばされて地面に頭から叩きつけられた。

そして薄れゆく意識の中で、これでいいんだ、と妙に納得していた。

「クアイツ、クアイツウウウツ！！」

地面の上にじわりと赤い染みが広がっていく。

人の世がくるなら、自分の居場所などない。フレイズと別れなければいけないのなら、この時でかまわない。

(これで、終わりだ・・・天に・・・)

その声と共に祝石はさらりと崩れて砂になった。

瞬間、フレイズの体も元に戻った。

「あ、ああ・・・」

体が震えて止まらない。

死、んだ・・・？クアイツが・・・？

12. どうして僕たちは共に生きてはいけなかったのだろう

フレイズはクアイツに駆け寄り、傍らに膝をついて震える手でそつと脈を調べた。

(まだ生きてる！)

それは弱々しいものだったが確かにまだ命あることを物語っていた。

「クアイツ！大丈夫、今助けるからね！」

フレイズは上着を脱ぐとそれを引き裂いて包帯代りに頭に巻いて止血する。

また、うつ伏せの体をひっくり返して呼吸を調べる。

「クアイツ、死なないで・・・」

出血がひどい。上着はすぐに赤く染まる。

とにかくこのままにしておけない。フレイズはクアイツを担ぎあげ、屋内へ運んだ。

「ん・・・」

明るい日差しでクアイツは目を覚ました。

生きてる・・・。

「いつ・・・」

左側頭部に強烈な痛みを覚え、手を遣ると包帯が巻かれていた。

「クアイツ、起きた？」

手に野草を山と抱えたフレイズがドアを開けて入ってきた。

「ああ」

「気分はどう？」

「大丈夫だ、悪くない」

起き上がるうとすると、

「ああ、だめ、動かないで」

フレイズは野草を机の上に置くと、クアイツの肩を持ってベッドに押し返した。

「とりあえずよく診せて。これ何本？」

フレイズはそれから目を覗きこんだり、脈をみたり心音を聞いた。りした。

「大丈夫そうだね。よかった……。今薬作るね。飛べたらもつと早く帰ってこれただけど」

「飛べたら？」

「うん、祝石壊れちゃって、もう変身できないんだ」

クアイツが倒れた後、祝石が崩れ去ったことを説明した。

フレイズは街をあちこち探したが、祝石はどれも砂となっていた。地の底の神の天への帰還とともに、祝石はその役割を終えたらしい。

「そうか……」

祝石がなくなった……。だがそれを喜ぶ獣人はもうどこにもいない。

もしもどこかにいたらば、歓喜していただろうに。

結局自分たちの存在とは何だったのか……。

初めから何もかも否定され、貶められ苦しめられて、最後は創造者とともに泡のように消えていった獣人。

ひどい疲労感が襲ってきてため息をついて目を閉じた。

「どうしたの？どこか痛い？」

フレイズが心配そうに気遣う。

「いいえ、大丈夫です。ただ……」

「ただ？」

「自分たちの存在は何だったのかと思って」

フレイズは悲しげな顔を見るとクアイツの胸に顔をうずめて寄り添った。

「僕は好きだよ、クアイツ。君に会えて本当によかった。それで解決はしないかい？」

フレイズは微笑んだ。

クアイツはその赤い髪をなでて、彼もまた笑った。

「他の人間もお前みたいだったら、こんな終わり方をしなかったかもしれないのにな」

「それは僕は半分獣人だからさ」

フレイズはきゅつとクアイツにかけられているシーツを握ってつぶやいた。

「どうして人間と獣人は共に生きていけなかったんだろう・・・」

「さあ・・・。人間がもう少し賢かったなら・・・獣人を虐げずにいたなら、歴史も変わっていたかもしれないが」

「うん・・・」

フレイズが目を閉じると、その眦から涙が落ちた。

「な、何を泣いて・・・」

クアイツは慌てた。

「ごめん・・・。僕が言ってもどうしようもないかもしれない。だけれど言わせて、きっと僕たちが間違っていた。祝石なんて卑怯な手段で君たちを縛ってはいけなかった。クアイツの言うとおり、僕たちがもつと賢かったなら、共に生きていく道を選べたかもしれないのに」

「フレイズ様、もちろんあなたが謝るべきことはない。全て初めから仕組まれていたことだったんだ。獣人は滅びるべき運命にあった。初めからいらないと同じ事だった」

フレイズが目をしばたかせると、また幾筋も涙が落ちた。

「悲しいことを言わないで。君がいないだなんて、僕には考えられない。どんなに呪われた運命でも、もしも生きて命を繋いでいたのなら、いつか僕が生まれたように、人の形をもつ獣人が現れて、いつか獣人も人間もない世界ができたかもしれない。そうすれば・・・」

フレイズは一度言葉を区切って、かすれる小さな声で言った。

「どうして僕たちは共に生きてはいけなかったのだろう・・・」

地の底から祝福を

ぬぐい去れない疑問をまた口にした。  
それはこの先訪れる、二人の別離を物語る。

### 13・約束

「人間が来たな・・・」

「うん・・・」

地の底の神の帰還の夜から数日。

フレイズの姿を追って人間たちがやってきたのだ。

今は街を回っているようだが、この王城にくるのも時間の問題だろう。

「早く人間の元に行きなさい。保護してくれるだろう」

「嫌。クアイツを置いていけない」

「・・・。何度も言ったじゃないですか・・・」

フレイズはふくれて黙った。

クアイツの頭部の怪我はしばらくは安静にする必要がある。

無理に動かせば脳に損傷が起こらないとも限らない。

動くにはもう2、3日様子を見たい。

「人間たち・・・、もっと来るのが遅ければ良かったのに」

悔しそうにこぶしを握りしめる。そうすればクアイツの回復を待つて逃げられる。

「いずれは別れなければならぬ。今がその時なのですよ」

「そんなの決めないでよ・・・。ずっと一緒にいようよ・・・」

「無理なんですよ、人間と獣人は・・・」

「どうして諦めるのさっ！クアイツは僕と一緒にいるの嫌なの！？」

クアイツは目を丸くして、

「そんなことはありません、ただフレイズ様のことを思うなら、これが一番なのです」

「そんなのちつとも僕のことを思ってないよ！離れたくないのに、どうして反対ばかりするのさ・・・」

「フレイズ様・・・」

クアイツはフレイズに手を差し伸べてその頭に手を遣り、引き寄

せた。

するとフレイズはクアイツの首に手をまわし、ぎゅっと抱きしめた。

クアイツはその後頭部をなでながら、

「どうやったらあなたに信頼していただけるのでしょうか」

「信頼……？」

「ええ。どうか私のことを信じて下さい。あなたのことを大切に思うからこそその意見だと。離ればなれになるのは私だって苦しい。私だってもちろんあなたをいつまでも見守っていたいと思う」

「うん……」

「けれど時を見誤ってはいけない。今離ればなれになると、このまま一緒に居続けて、結果二人とも生きる道を見失うのではどうですか？」

「……」

「分かるでしょうか？私は決してあなたのことを思っていないなんてことはない。どうか信じて人間のもとへお行きなさい」

フレイズはクアイツの体を離すと、やっとこくりとうなずいた。

「よかった……」

「クアイツ、絶対人間に捕まっちゃ駄目だよ。信じるから、約束して」

「はい」

クアイツは笑顔で答えた。

フレイズはその手を握って言った。

「僕はこの鍵をかけて出ていく。そうすれば誰も無理に入ってくることはないだろう。ほかの部屋に財宝をばらまいておけば、きつとこんな部屋忘れられる。それで、1週間もしたら見にくるよ。その時は、いないでくれ……」

「分かっています。内側の鍵を開けて逃げればいいんですね」

「そう。絶対に誰にも見つからないように夜にでも逃げるんだ。逃げて、逃げて……」

フレイズは大粒の涙をぼろぼろとこぼした。  
クアイツは握られた手をそつと握り返して、

「そして、いつか逢いましょう。生きていればまた必ず……」

「うん、うん……」

「さあ、早く行くんです。ここに一緒にいるのが見つかったらお終いだ」

「分かった……」

するりと手を離して、鍵を持ってドアを開ける。

「クアイツ、絶対だよ」

「ええ」

フレイズはドアを閉めるとカチャリと鍵をかけた。

その鍵を大切にズボンにしまうと、力いっぱい駆け出した。

その後フレイズはうまく人間たち迎え入れられた。

少々目立つ赤い髪を咎めるような者はいない。

人間もまた多くを失っていたから、フレイズのような少年は快く歓迎された。

今までどこにいたのか、家族はどうしたのかいろいろ聞かれたが、適当な嘘について同情を買った。

「坊や、おばさんのとこにくるか？ちょうど同じ年頃の子がいたんだけど、獣人に……」

ふくよかな中年の女性は涙ぐんで言った。

「それは、お気の毒に……」

だがフレイズはその心の奥が少しうずく。

その子供を殺したのは他でもない自分かもしれない……。  
ただ今それを思っただけで何になる。

僕は約束した。

必ず生きてクアイツと再会すると。

後日、フレイズは城に入り、あの部屋を訪れた。

地の底から祝福を

部屋の中は空っぽだった。  
安堵のため息をついて、彼が寝ていたベッドに顔をうずめた。

## 14・終章

狂乱の覚醒から獣人が滅び、幾つもの年が過ぎた。

獣人のいなくなつた世界で人間たちは新たな争いを繰り返して歴史を築き上げていった。

フレイズは薬草師になり、片田舎に居を構え、平凡な毎日を送っていた。

だけど空を見上げては思いを馳せない日はない。

今のところ獣人が捕まつたという話は聞いたことがない。

けれど知らない間にどこかで人間に捕まつて殺されているかもしれない。

「クアイツ・・・」

何度この名を空に向かつてつぶやいたことだろう。

いくら年を重ねても、その顔も声もはっきりと蘇ってくる。

あの約束はいつ果たされるのだろうか。

あんなに何度も約束したのに・・・。

こんなことならあの時わがままを貫いてずっと一緒にいればよかった。

「フレイズ、フレイズ！」

フレイズを呼ぶ声がした。

声の主は病気でもないのに毎日フレイズのところに来る近くの村の娘だった。

「こんなところでなにしてるの？」

「別に・・・」

「また昔別れた人のこと思い出してるんでしょ」

「・・・」

この娘は根掘り葉掘りいろいろ聞いてくるので仕方なく虚実折り混ぜて自分のことを話してある。

でもクアイツのことは言えないからそういうことにしてある。

昔再会を約束した恋人がいる、と。

「約束したんだ・・・」

「そんなの、こんなに何年もたつてるのに全然現れないんでしょ？  
もうどこかで誰かと幸せになってるよ」

それはない。獣人は彼以外滅んでしまった。彼はもう一人でいる  
しかないのだ。

一人で・・・。

ますます心が重くなる。

あの時彼の言葉を鵜呑みにしてしまったが、今考えれば彼の犠牲  
の上に自分の今があるのだ。

自分は人の間に入って生きていける、そして彼も逃げのびて生き  
ていくことができる。

あの時そう信じたが、クアイツは果たしてどうやって生きていく  
ことができるのだろうか。

獣人が滅び、彼の仲間となるものはいない。人間は敵だ、見つか  
れば最後、殺されてしまうのは確実。始終逃げ隠れして安息などな  
い。

よくよく考えればそう分かったかもしれないが、そこまで思い至  
らなかったのはまだ自分が幼かったせいだ。

クアイツの言葉は全て自分を生かすためのものだった。

そうでなければ何故クアイツは今でも現れないのだろうか。

あんなに賢い彼のことだ、いついつにどこどこで逢いましょう、  
と計画を立てられたはずだ。

だけどそんな確約はしなかった。

ただいつか逢いましょう、と・・・。

その時の笑顔を思い出して泣けてきた。

「フレイズ・・・」

「ごめん、男が泣くなんて。ちょっと思い出して・・・」

慌てて服の袖で目尻に浮かんだ涙をぬぐった。

「ううん。大事な人なんだよね。ごめん、からかったりして」

「いや、僕こそいつまでも未練たらたらで情けないよ。もう逢えないんだって、分かっているんだけど、でも心の整理つかなくって・・・」

「もう逢えない。言葉にすると余計に切なさが増す。」

「うん、分かる。そんな簡単に割り切れないよね」

「見れば彼女も泣いている。」

「え、ちよっ・・・」

「えへへー、もらい泣き」

フレイズはハンカチでも持っていないかと探したがあいにくとそんな気の利いたものは携帯していない。

彼女が自分のポケットからきれいに折りたたまれたハンカチを出して涙を拭いていた。

「あの、あのね。心の整理がついてからでいいから、ね。あの・・・」

「ん・・・」

フレイズは彼女の肩をそっと抱き寄せた。

僕はクアイツに貰ったこの命を繋いでいかなくてもはいけない。

命を繋いでいけばいつか獣人も人間もない世界がくると自分自身で言った言葉のためにも。半分獣人の血が入っているこの身、いつか薄く薄く人の中に溶け込んで、僕が夢見た獣人と人間が共に生きていける世界の端緒を開いていけるかもしれないから。

「夢想かもしれないし現実的ではないかもしれない。」

「けれど、なければいい命などないはずだ。滅びることが運命だったとしても、そこに生きていて欲しいと願うことで運命は変えられるかもしれない。」

「ずっと一緒にいたかった。それが叶わない運命でもずっと夢見ていたい。」

人間と獣人、一つになって、生きていけるように。

僕の体を流れる獣人の血を繋いでいくんだ。

滅びゆく運命を悟って自ら犠牲になつたあの優しい命に報いるた

地の底から祝福を

めし。  
。じりこまじり。

## 14・終章（後書き）

ここまでお読みいただきありがとうございます。ご感想お待ちしております。

地の底から祝福を

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8533d/>

---

地の底から祝福を

2009年5月31日18時35分発行

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。